

---

# あの頃に戻れたら

弥生雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの頃に戻れたら

### 【コード】

N0422P

### 【作者名】

弥生雨

### 【あらすじ】

お祭りを題材にした青春小説。

「今夜、一緒にお祭りにいかない？」

幼馴染の舞谷鈴子まいたに・りんこから、そんな電話が舞い込んできたのは、夏盛りの昼のことだった。

断る理由はなかったたので、俺はいいよ、とすぐさま了承した。

最近はずっと自宅に閉じこもりつきりで宿題のレポート作成に追われていたので、久々に外へでて、気分転換をはかるのも良いだろう。

それに、鈴子からの誘い、というのも断れないポイントの一つだ。彼女とは家が隣同士で、中学校までは毎日一緒に登校する仲だった。しかし、どこをどう間違えてしまったのか、高校は別々になってしまい、以降卒業までの三年間は、たまに顔を合わせるだけの間柄になってしまった。

鈴子との交流が少なくなった俺は、どこか空虚な気持ちを抱えたまま、なんとなく地元の大学へ進学した。内心、彼女との交流が復活することを諦めてしまっていたが、何の申し合わせか、彼女も俺と同じ大学へと進学していた。

学科もクラスも同じだったが、三年間のブランクはやはり大きかったようだ。たまに顔を合わせても会釈するくらいで、入学してからこの数ヶ月、彼女とまともに会話すらしていなかった。

そんな彼女からの、まさかのお誘いである。俺も彼女も、まだ交流が微かにあつた高校一年生の頃に携帯電話を持てるようになり、互いに連絡は取れるようにしていたのだが、それで連絡を取り合っていたのは、せいぜい高校一年目だけで、二年になるころにはほとんどご無沙汰になっていた。

連絡を取ることがなくなったその二、三年の間、彼女のことを考えない日はなかったように思う。

気がつけば、彼女はどうしているだろうか、元気にしているだろ

うか そんな風に、思いを馳せていた。

気になるのならば、メールでも送ればすぐに済むというのに、どうしてか、それができなかった。

なにか気の利いた文章を書こうとしても思いつかなくて、結局、『久しぶり。元気？ 最近、どうしてる？』

なんて簡単な内容のメールしか作成できなくて、そして、それすらも送信することができない。

送信のボタンを押す、そのちっぼけな勇気がどうしても出せなかった。

そのくせ、彼女からの連絡を、ずっと待っていたりした。

彼女も、もしかしたら、俺と同じようなことを考えているのかも知れない、ちっぼけな勇気を振り絞って、連絡をくれるかもしれない……なんて、ばからしい淡い期待を抱きつつだ。

結局、彼女からのメールが届くことはなかった。

やがて、俺ばかりが、彼女のことを考えているような気がした。

彼女は、俺のことなんてもう忘れかけているのかもしれない。

そんな空しい気持ちに包まれていた頃、思い出したかのように舞い込んできた、彼女からの連絡。

彼女からすれば、単なる義理での連絡なのかも知れないが、それでも、一抹の期待を抱かずには、いられなかった。

待ち合わせまでは、あと数時間。

それが、今からひどく待ち遠しい。

夕焼けの眩しい時分、早めに待ち合わせ場所へと出てきた俺は、そわそわした気持ちを隠しきれなかった。

いつ来るだろう……いつ来るだろう……気を揉みながら、待った。待ち合わせ時間までは、あと十分かそこらというところ。だが、その十分かそこらが、やけに長く感じられた。

すこし、落ち着こう。

溜息をついて、俺は夕陽に眼を細めた。と、そのとき、

「おうい、良介え！」

と後ろから声を掛けられ、俺はすぐさま振り返った。長い髪を頭  
の後ろの方で結び、花びらの模様が鮮やかな萌黄色の浴衣を着た鈴  
子が、少し離れたところで手を振っていた。

彼女が、小走りで俺の方に駆け寄ってきて、微笑んで言った。

「待った？」

「いや、今来たところだよ」

俺が軽い嘘をつくとき、彼女はふうん……？ と俺の顔をのぞき込  
むように見上げてきた。

ふわりと漂ってきたシャンプーかなにかの良い香りに、思わずど  
きりとする。

「……こうしてまともに顔合わせるのって久しぶりだね、良介」

「ホントにね」

「元気してた？」

「まあ……そこそこ。そっちは？」

「元気なもんだよ。相変わらずね」

中学の頃から変わらない、ボーイッシュな口調で鈴子は答えた。  
そのくせ髪を結んだ浴衣姿がすごく女性的で色っぽく、それが俺の  
胸をさらに高鳴らせる。今が夕暮れで良かった、と俺は思った。も  
しかしたら、顔が真っ赤になっているかもしれない。

ふふ、と溜息のような声をもらした彼女と、あらためて眼があっ  
た。こうしてよく見返してみると、昔も可愛かったけれど、もっと  
可愛くなっていることに気づく。いや、可愛くなったというよりは、  
綺麗になったと言ったほうが正しいかもしれない。

彼女は、何を話したら良いだろう……と考えているような、微か  
な戸惑いが入り交じった眼で、俺を見ていた。それは俺も同じだっ  
たけれど。

三年の、ほぼ空白の時間はやはり大きい。この戸惑いが、今の俺  
と今の彼女の間にある距離なのだろう。

この三年近く、彼女は何を考えて過ごしてきたのだろう。日々過ごしていくなかで、ほんの少しだけでも、俺のことを思い出して、考えてくれたことがあるのだろうか。俺には、分からない。

「……、ね、良介」

おずおずと、鈴子何か言いかけたとき、

「おい、鈴子ー！」

と、鈴子の後ろのほうから、声が飛んできた。鈴子が振り向き、

「あ、やっほー！」

手を挙げてそれに応えた。

そちらの方に眼を向けると、二組の男女がいた。そのうちの、眼鏡をかけた女の子が手を振っていた。

「知り合い？」

「うん、サークルの友達。三人はね。一人は、友達のアネキだよ」

俺は鈴子や、その眼鏡の女の子よりもかなり大人びた女性とその隣にいた、なかなか格好のいい男子を見て、納得した。似ている。きっとその二人が姉弟なのだろう。

そして、眼鏡の女の子は、同じく眼鏡をかけた男の子と手をつないでいた。あの眼鏡の二人はカップルなのだろう。仲がよさそうだ。四人が、俺たちのほうへ歩み寄ってくる。鈴子が楽しそうに、眼鏡の女の子と手を合わせて笑い合った。

友達も一緒だったのか……そう思うと、少し残念な気はしたが、祭りを楽しむのにそう支障はない……だろう。

「ね、鈴子、そっちのお兄さんは誰？」

鈴子とはしゃいでいた眼鏡の女の子が、俺の方を向いて尋ねた。

「こいつは幼馴染の良介。一応、同じガッコの人だよ」

「そうなんだ……。はじめまして。私、冬月美紗ふゆつき・みさっていいいます。で、こっちは秋風真人あきかぜ・まさと。よろしくね」

眼鏡の女の子　冬月美紗がぺこりとお辞儀をした。彼氏と思われる秋風真人も、よろしく、と微笑んでくる。

「如月良介きづきりょうすけです。こちらこそよろしく」

俺もかるく礼を返す。

「朝川恭一だ。よろしく」あさかわ・きょういち

「あたしはこいつの姉で朝川美月。あさかわ・みづきよろしくな、兄さん」  
よろしく、と姉弟のほうにも会釈をする。

「ね、さっそく回ってこようよ。ほらはやくはやく!」

美紗が真人の手を引きながら、駆け出してゆく。若いつていいねえ、なんて呟きながら、美月さんがゆったりと後に続く。

「俺らも行こうぜ」

先に行った三人を親指で指して、恭一が鈴子に行った。

「あ、うん。いこいこ」

鈴子は笑顔で答え、恭一と並んで三人の後を追う。

明らかに鈴子だけに向けた？俺ら？という恭一の言いかたと、手こそつないではないが、並んで歩く恭一と鈴子の姿に、俺は衝撃を受けていた。

少し遅れて、二人の後に続く。一定の距離をおいて、俺は鈴子と恭一の後ろを歩いている。

この二人も、付き合っているのだろうか。あの言いかたと、二人並んで歩いてゆくその姿を見ると、そうとも考えられる。

どうして……。妙な苛立ちと寂寥感が、ふつふつとわき上がる。

いや、無理もない。鈴子は綺麗だし、それに性格はボーイッシュで人当たりの良いタイプだ。彼氏ぐらいできていたって、なんの不思議でもない。

とはいえ、それを認めたくないというのも、正直な気持ちだった。今すぐ逃げ出したい。鈴子に彼氏がいるなんて知っていたら、絶対に来たりしなかったのに。

やりきれない苛立ちを押さえこみ、俺は小さく溜息をついた。

鈴子と恭一、そして俺は先に行った三人にようやく追いついた。

美紗と真人が、楽しそうに金魚すくいをしている。それを少し後ろから、ビール缶片手に眺めている美月さん。いつの間にも買ったのだろうか、謎である。

鈴子が、金魚すくいを楽しむ二人の手元をのぞき込んでいる。

恭一の姿はなかった。俺も美月さんと同じように、少し離れたところから三人の様子を眺めていた。

そのとき、

「おい」

と後ろから声をかけられ、俺は振り返った。出店で買ってきたらしいイカ焼きとフランクフルトを携えた恭一が、俺を薄く睨み付けていた。

「何？」

俺が醒めた声で返すと、恭一はふんと鼻を鳴らした。

「お前、舞谷の幼馴染だったよな。どんな仲なんだ？」

「どんなって……別に、ただの幼馴染だよ」

「……そうか。もう分かっているとは思うけど、俺、アイツのことが気に入ってたんだ。手を出したりしたら、承知しねえからな」

おれは、内心ぎくりとしながらも、なんとか平静を保つ。

「 どうして、そんなことを俺に？」

「別に。ただ、お前がずっとアイツを眼で追ってるから、気に入らなかつただけさ」

吐き捨てるように呟き、恭一は俺を通り越して鈴子たちのほうへ向かった。

ちょうど金魚すくいを終えた三人が立ち上がったところだった。

少し離れていた美月さんも合流する。

別の出店へ向かうのだろう。そろそろとみんなが移動を開始するなか、

「ほい、舞谷」

言って、恭一がフランクフルトを鈴子へ差し出した。

「ん、ありがとう」

鈴子は、嬉しそうにそれを受け取った。こういう祭りの出店で  
るフランクフルトは、鈴子の大好物だ。

それを知っているのは、俺だけ……のはずだった。少なくとも、  
数年前までは。

なんてことはない、それを知っているのが、一人増えただけだ  
そんな風には、とても思えなかった。

あいつの言い草からして……多分、二人が付き合っているのは、  
間違いないだろう。

俺はやるせない気持ちで、仲の良い二人から眼をそらした。

その後、色々な出店を回った後、少し開けた場所で休憩すること  
になった。

みんなは出店で買った缶カクテルやビールを飲みながら、焼きそ  
ばやらたこ焼きやらをついついている。

俺はというと、鈴子と恭一の仲良さげな姿に我慢ができず、みん  
なからかなり離れた場所にある木の下に座り込んで、出店で買った  
缶カクテルをあおっていた。

仕方がない。鈴子は美人だ。彼氏ができていたって、しょうがな  
い話だ。ただの幼馴染。それ以上でもそれ以下でもない俺には、  
どんな文句をつける権利だつてない。

彼女がそれで楽しく過ごせているのなら、いいことじゃないか…  
…。

そんな風に思い込もうとして、カクテルをぐびぐびと飲む。

……馬鹿野郎が。そんな簡単に割り切れるわけないだろう、俺。

この数年……彼女を、思わない日はなかった。だというのに、ど  
こその馬の骨ともしれない輩に、彼女をかつ攫われてしまった。

許せない。あの恭一とかいうヤツが……。そしてそれ以上に、俺  
は俺のことが許せなかった。

どうして今まで、彼女に連絡の一つもよこさなかった。勇気を出  
して、好きだと告げなかった。

そう告げていたら、もしかしたら、今とは違う今日を迎えていた

のかも知れないのに……。

木にもたれかかって、俺は大きく溜息をついた。

どちらにしたって　いまさらの話だ。

後悔したところで、もう遅すぎる……。

どこで道を違えてしまったのだろうか。少なくとも高校に入る前

あの頃までは、俺たちはまだ、同じ道を歩いていたはずだった。

日が経つにつれて、少なくなっただけのお互いのやりとり　それ

に反して、彼女の事を考える時間は、だんだん多くなっていった。

彼女を思い続ける日々　焦がれる日々。思い出がだんだん色あ

せてゆく中、彼女だけは、はつきりとした色を持って俺の中に存在

していた。

しかし……それも、今日までだ。

彼女の中に俺はいない。俺の知っていた鈴子は……あの頃の鈴子

は、もういない。

人は変わってゆく。季節が移り変わっていくように。

俺のこの彼女への思いも、あとは色あせてゆくのを待つばかりだ

。

カクテルの残りを飲み干して、俺は空を仰いだ。

そこには、満点の星が煌めいている。

「綺麗だな……」

呟いて、少し寂しくなった。

まだ、鈴子が隣にいて、

「そうだね」

と返してくれることを、期待している俺がいたからだ。

そんなことを期待したって、もう、どうしようもないというのに。

……もしも。

もしも、あの頃に戻れるのだとしたら……、俺は伝えることができ

きるのだろうか。

彼女に　鈴子に、？好きだ？という正直な気持ち。

考えたところで、分からない。そうだ、考えたって無駄なんだ。

だつてもう、どうすることもできないのだから。

溜息をつくように深々と息を吐き出したとき、視界の左の方から、不意にかき氷が飛び出してきた。

俺は一瞬だけかき氷を凝視し、それからゆっくりと左を向く。

そこには、左手で持ったかき氷を差し出す鈴子の姿があった。右手には、イチゴ味のかき氷を持っている。

「どうぞ」

鈴子が言った。

「あ、ああ……ありがとう」

俺は、差し出されたかき氷を受け取った。かき氷には、青いシロップがかかっている。

ブルーハワイ味。俺の 大好きな味だ。

よいしょ、と呟いて、鈴子は俺の隣に腰を下ろした。

「探したよ、良介。気づいたらいなくなってるんだもん……びっくりしちゃった。いったいどうしたの？」

「いや……どうもしないよ。それよりも、いいのか？」

「何が？ みんなのこと？ 多分大丈夫だと思うよ。美紗も真人くんも酔っぱらってたけど、美月さんがついてるし……」

誰よりも早くビールを飲んでいたあの人がお目付役で大丈夫なのか、とも思ったが、なるほど、あれで結構たよりになる存在なのだろう。

まあ、俺が、大丈夫？ と聞いたのはみんなのことではなく、

別のヤツの事なのだけれど。

「そうじゃなくて……えっと、恭一、とかいったっけ？」

「恭一くん？ ……なんで？」

「いや、なんていうか、その……」

本当は、死んでもこんなことは訊きたくない。まだ辛うじて残っている期待を自分の手で叩きつぶすなんて、そんなことはやりたくないのに……訊かすには、いられなかった。

「けっこう、仲が良さそうだったからさ……付き合ってるのかな、

とか思つて」

鈴子は、一瞬だけぽかんとした表情になった。そして、すぐさま苦笑する。

「……まさか。向こうはその気があるみたいだけど、わたしは別に……」

かき氷をがしがしゃかき混ぜながら、鈴子は続ける。

「まあ……確かに、いい人だとは思つよ。ちよつとけんかつ早かったりするけど。でも……友達以上には思えないかな」

「他に、気になる人がいるとか？」

「ん……、まあ、ね」

苦笑したまま、鈴子はかき氷を口に運んだ。

胸が高鳴り出すのを、俺は感じていた。でも、諦めのような思いも、同じように感じていた。

俺であるはずがない……そんな予感がした。俺の知らない誰か彼女を安心させることができるその誰か……彼女の気持ちを独り占めする、その誰かがとても羨ましい。

俺は、溶けかけたブルーハワイ味のかき氷をストローのスプーンですくい、一口食べた。

甘くさわやかなはずの味が、ほんの少しだけ、苦々しく感じられた。

その気になる人は、誰なのか……それを聞く勇氣は、もう、俺にはなかった。

「こうして一緒にお祭りを楽しむのって、何年ぶりだったけ？」

鈴子が訊いてくる。

「……四年か、五年か……それくらいかな」

「ほんとに、久しぶりだよね……。うん 久しぶり……」

まるで自分に言いかけせるように呟いて、鈴子はかき氷を食べ進める。

静寂が、俺たちの間に流れた。少し遠くの所からは、お祭りを楽しむ人々の賑わいの声。もう夜なのに、なんだか、じつとりと暑い。

俺はちらりと鈴子を見た。ゆつくりと、かき氷を口に運んでいる。彼女のうなじが、汗で光っていた。とても綺麗だ……。シャンプーの良い香り。俺は少しだけ、頭がくらくらするのを感じていた。ダメだ。見続けていたら、どうにかなくなってしまいそうだ。残りのかき氷を、一気にかき込んだ。そうすると、痺れだしていた頭の中が、少し冴えてきたように思えた。

「……………、良介こそさ、いるの？」  
「え？」

俺は、再び鈴子のほうを向く。

「何が？」

「何が、って……………、気になる人だよ」

「俺は……………、その……………」

お前だよ、なんて……………とても言えるはずがなかった。

「い、いないよ、別に……………」

とっさにそう答える。鈴子は、ふうん……………？ と溜息をつく。

「そうなんだ……………、つまんないの。せつかく、いっぱいからかってやろうと思ってたのに」

ちえー、と鈴子は唇をとがらせる。その愛らしい姿に、俺はまたどきどきしてしまう。

ふと、鈴子が顔を上げて、

「あ」

と、ちいさくもらした。

「ん？」

俺もつられて顔を上げた。向こうの方から、誰かが早足で近づいてきていた。

恭一だった。ものすごい形相で、俺を睨んでいる。

ほとんど駆け足で寄ってきた恭一が、無言で俺の胸ぐらを掴み、むりやり立ち上がらせる。

「どうしたの、恭一く」

鈴子が言いかけたとき、俺の右頬に激痛が走った。恭一の拳が炸

裂したのだ。

俺は殴り倒されて、地面に膝をついた。頬を押さえ、恭一を見上げる。殺意のこもった瞳が、俺を静かに見下していた。

「なに、しゃがる……」

ゆっくり立ち上がりながら、低い声で俺は言った。恭一は何も言わず、もう一度俺を殴りつけた。左頬に激痛。続けざまにもう一度右頬を殴られ、俺はまた膝をついた。口の中を、さびた鉄のような味が支配する。

「やめて、恭一くん！」

鈴子がとめようとする。しかし、恭一はそれを払いのけ、再び俺の胸ぐらを掴み上げた。

「お前さ……俺がなんていったか覚えてるよな？　なのに、なんで抜け駆けしてんだよ」

「抜け駆け、だあ……？」

吐き捨てるように俺が言うと、恭一は舌打ちして俺を突き放すや、腹に膝蹴りを見舞ってきた。

鈍い痛みにも、吐き気が込み上げてくる。身を折って呻いた俺を、下から突き上げてくるような一撃が出迎えた。鼻先に拳を叩き込まれ、思わずひっくり返った俺の腹を、恭一が思いきり踏みつけてくる。

「こいつに手えだしたら承知しねえつつただろ……。ったく、大人しく何もしなけりやいいものを……」

ぐりぐりと、俺の腹を踏みつけながら、恭一は冷たく言い放つ。

俺は、思わず強く拳を握りしめた。煮えたぎるような怒りが、ふつふつとわき上がってくる。

「お前なんざ、もともとお呼びじゃねえんだよ。舞谷は俺のもんだ。二度と近づくな」

どん、とひとときわ強く俺を踏みつけて、恭一はきびすを返した。

「行くぞ、舞谷」

言って、乱暴に鈴子の手を引っつかんで、連れて行くこととする。

「い、やつ……離してっ！」

鈴子が抵抗するが、力で勝てるはずもない。むりやり連れて行かれそうになるのを、

「待てよ……」

俺が、呼び止めた。立ち上がり、血の味がする唾をそばにはき出して、口元を拭う。

「鈴子は嫌がつてるだろ。その手を離せよ、クソ野郎」

クソ野郎、という言葉に恭一が怒りに顔を引きつらせた。

鈴子を掴む手を離し、足早に近づいてきた恭一が、怒りにまかせて俺へ拳を叩き込んできた。

「クソ野郎……？ クソ野郎だと？ もう一度言ってみろ……、もう一度、言ってみろっ！！」

一発、二発、三発 俺を殴りつける手は、止まらない。

「ザコのくせに調子こきやがって……！ もっとブチのめされたいのか、ああ!？」

ヤツの拳を受けながら、俺は自分の拳を力強く握りしめていた。

恭一には残念な話だが、こちらも腕っ節にはそれなりに自信がある。

ものすごい一発を、鼻っ柱にお見舞いしてやるっ。

鼻の骨がヘシ折れるくらい強烈なやつを食らえば、少しは眼が醒めるだろう。

俺の我慢もそろそろ限界だ。

さあ、そろそろ と俺が拳を引き絞ろうとした、刹那、

「おい」

恭一の後ろの方から声を投げかけると同時、

「いつ いでででっ!？」

悲鳴を上げた恭一が、誰かに後ろから引っ張られるように尻餅をついた。

俺が、ふっと我に返って顔を上げると、そこにはビール缶を片手に、恭一の後頭部を引っつかむ美月さんの姿があった。

「まったく、なかなか戻ってこないから何してるかと思ったら……」

「あ、姉貴……」

恭一が情けない声を出す。

「一方的に他人様に手えだしやがって……あたしはあんたをそんな風に育てた覚えはないよ」

「姉貴には、関係ねえだろっ……！」

「やかましい」

美月さんが、恭一の脳天に鉄拳をお見舞いする。恭一は蹲って頭を押さえ、うめき声を上げた。

ふう、と溜息をつき、美月さんは俺をまっすぐに見据えた。

「悪かったね、ウチの弟がたいそうなことしちまって。こいつにはきつく言いきかせとくから、どうか、カンベンしてやってくれないかい？」

「え？ ……ええ、まあ……大丈夫ですよ」

俺は苦笑混じりで、そう答えた。

「鈴子ちゃんも、ごめんね。金輪際、こんな真似はさせないと誓わせるから、許してやってくれ」

「あ……はい」

鈴子も、苦笑気味に答えた。

そして美月さんは、優しいな笑みをかすかに浮かべた。

「ありがとね、兄さん。こんなんでも、一応、大切な弟ってやつだからさ……。あんたが優しい人で良かった」

お礼に、後でおごるよ、と美月さんは囁くように言った。

「おら、行くぞ恭一。邪魔者はさっさと退散するよ」

言って、美月さんは蹲る恭一の頭を引っつかみ、引きずるようにして連れて行く。

俺と鈴子は、遠ざかってゆく二人の姿を見届けていた。

姿が見えなくなった頃、鈴子は俺の方を向き、ゆっくり近づいて

きた。

「大丈夫……？」

そつと手を伸ばし、俺の頬に触れてくる。

「多分ね」

痛みに顔を歪ませて、俺は呟いた。こっぴどくやられたおかげで、顔も腹もジンジンしている。

これだけぼこぼこにされたのは、中学の時に不良とケンカをやらかしたとき以来じゃないだろうか。

男の勲章、というにはあまりにもアレだ。明日、青あざが残ってなきやいいんだけど……。

「……ちよつと待つてて」

言つて、鈴子は急いでどこかへと走つていった。そして、すぐさまぱたぱたと急ぎ足で帰つてくる。

手には濡らしたハンカチが握られていた。

そして、先ほどの木の下で、正座をするように座つた鈴子が自分の膝をぱんぱんとたたき、

「ほら、おいで」

なんて言つてくる。膝枕だ。

「え、あ……、でも……」

「つべこべ言わずに、きなさい」

ぴしゃりと言われ、しかたなく、俺は恥ずかしさを押し殺しながら、彼女の膝に頭を乗せた。

ひんやりとしたハンカチが、額にのせられる。

「どう？ 少しは落ち着いた？」

「あー……、うん、まあ……」

すぐくどきどきしてそれどころじゃねえよ、というのが正直な所なのだが。

ハンカチで俺の頬を冷やししながら、鈴子は俺の顔をじつと見つめていた。

「……な、なに？」

恥ずかしくなり、俺は少し目をそらす。

「うっん……なんでもないよ」

鈴子は、首を振って答えた。

「良介、よく我慢したね。あのときみたいにな、またやらかしたらどうしようって、ヒヤヒヤしちゃった」

「結構ギリギリだったけどな……。まあ、俺も少しは成長したってことだろ」

俺は、昔のことを思い出しながら、しみじみと答えた。

あのとき、とは恐らく、中学生の頃に不良とケンカをやらかした一件のことだろう。

なんとか話し合いで決着をつければ良かったのだろうが……当時、短気で切れやすかった俺は、嫌がる鈴子に手を出そうとする同級生の不良を、派手な殴り合いの末、ぶちのめした。

俺もかなりぼろくそにやられていたけれども、相手を病院送りにした俺の方がとがめられることになり、親から担任から、いやというほど叱り通された。苦々しくも、少しだけ誇らしい思い出だ。

「あの頃の良介って、怒ると見境つかなくなってたもんね……」

思い出を懐かしむような口調で、鈴子はぼつりと言った。

「そう考えると……少しは成長したんだね。でも変わってないところも、やっぱりあったけど」

「変わってないところ？」

「……嘘ついたのでしょ、さっき」

その言葉に、俺は思わずどきりとなる。

「さっきって……？」

「気になる人がいるかどうかって、わたしが訊いたとき」

「あー、いや……その……」

俺は慌てて取り繕おうとするが、鈴子の見透かしているような表情を見て、観念し、頷いた。

昔から、鈴子に嘘をついてもすぐに見破られてばかりだった。どんなに巧妙な嘘をついても、そのたびに、嘘だと彼女は見抜いてし

まう。どうして分かってしまうのか　今でも分からない。

「……で、誰？　良介の気になる人って。同じ学校の人？」

「さあ……。お前だったりしてね」

俺は恥ずかしさを必死に押さえ込んで、冗談めかす口調で言った。

鈴子は一瞬だけ、驚きの表情。そしてすぐさま、

「ばあか」

と、微笑みながら、呟くように言った。どくん、と俺の胸が高鳴る。

「……そういうお前こそ、誰なんだよ。気になる人ってさ」

仕返しにそう聞き返すと、「そうだなあ……」と、鈴子はゆっくりと顔を上げ、どこか遠くを見つめた。

「素直じゃなくて……。嘘をつくのがへたくそで、ちよつとだけ不器用な　　今、私の膝に頭を乗っけてる幼馴染かな」

え……。と俺は思わず間抜けな声をもらした。鈴子が恥ずかしそうに苦笑する。

「なによ。もう少し嬉しそうな顔したっていいんじゃない？」

そんなことを言うってくる。俺は、嬉しい顔をする余裕はなかった。心臓がこの胸を飛び出してしまいそうなほど、強く脈打っている。顔がかあつと熱くなり、知らず知らず、呼吸が速くなってくる。

「……いつたい、いつから？」

「いつからって……。ずっと前からだよ。子供の頃から、ずっと」

そつと目を閉じて、鈴子は静かに続ける。

「だからね、別々の高校に行かなきゃいけなくなったとき、すごく寂しかった。それまで、一緒にいるのが当たり前だったもんね。……いっぱい連絡取りたかった。いっぱい　話したかった」

そこで、鈴子は不意に吹き出すように笑い、恥ずかしそうに自分の頬をかいた。

「でもさ、なんか照れくさくってね……。結局、話したいのに話し出せなくて……。今日までずるずる来ちゃった。その間、ずっと考えて

たよ、良介のこと。元気かな、とか……他に好きな人、できてないかな……とか。……メールで連絡を取れば、すぐに分かるっていうのにね」

やがて鈴子は溜息をつき、夜空を仰いだ。

「時々ね、もし……あの頃に帰れるとしたら、もっと勇気を出しとけば良かった……って思うこと、あったんだ。そんなこと考えたって、仕方ないのにね……」

「……俺もだよ」

「え……?」

「俺もさ、同じこと考えてた。あの頃に帰れたら……って。ずっと……ずっと、考えてた」

「……今も、そう考えてる?」

「いや」

俺は身を起こして、鈴子に向き直った。数年ぶりに真っ直ぐ彼女を、見据える。

「今日は、ちゃんと伝えられたもの……。お前の、勇気のおかげで」

「……うん」

そう……。今日、このお祭りにさそってくれた　鈴子の勇気のおかげだ。

そして　今度は、俺が勇気を出す番だ。

「なあ、鈴子」

「ん……?」

「……俺と、付き合ってくれないか」

「……、うん」

鈴子はゆっくりりと、嬉しそうに頷いてくれた。

不意に、大きな音と共に、空に巨大な光の花が咲いた。

俺と鈴子が、同時に空へと眼をやる。

もう一発、盛大に光の花が夜空へ咲き乱れた。

それは、祭りの締めイベントである、花火大会の開始を告げる

ものだった。

「……綺麗だな」

「……そうだね」

次々と打ち上げられる花火を見つめながら、俺と鈴子は自然と寄り添っていた。

鈴子が俺の肩へ頭を寄りかけて、小さな声で、少しだけ不満そうにこう言った。

「さっきの言葉、もう少し早く聞きたかったな……」

「……ごめんな、遅くなって」

「……今、わたしがしてほしいこと 分かったら、許してあげるからかうような口調で、鈴子が呟く。

「してほしいこと……?」

俺が尋ね返すけれど、鈴子からの返事はない。見ると、彼女はこちらを向いて、眼を閉じていた。

恥ずかしさと、苦笑とが、同時に込み上げてくる。

辺りはそう人がいるわけではなく、誰かに見られる心配はない。

俺はそっと、彼女とキスを交わした。俺たちを祝福するかのよう  
に、花火が大空へ弾けて、消えてゆく。

俺たちの青春は、まだ、始まったばかりだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0422p/>

---

あの頃に戻れたら

2010年11月21日17時55分発行